レーモン・ジャン頌

杉山　毅

加齢のため、記憶力、注意力の著しい減退を自覚し、半ば自嘲的に忘却王などと称しているので、以下の文章に誤字、内容の取り違えなどがあることも百も承知の上で、この随想まがいの文章を書かせていただくことにした。枯れ木も山の賑わい、と思っていただければ幸いである。

ことの始まりは、本年 2015 年の春 3 月、まったくの偶然ながら、レーモン・ジャンが、数年前の 2012 年 4 月 3 日、死因は不詳だが、86 歳の生涯を閉じていたことを知ったことであった。

レーモン・ジャンとは、彼が長年住み慣れたエクスを去って、ヴォクルューズ県のアプトに近いガルガに居を移した後の 2006 年頃まで、文通を続けていたが、当方が怠惰な生活に慣れてしまったせいか、いつしか音信は途絶えていた。

かなり以前から、身辺整理を心がけてきた筆者は、転居の度に蔵書を整理してきたので、手許に仏書は少なくなってしまったが、なぜか、彼の作品だけはいまも手元に残しているものが多く、彼からもいくつかの作品の贈呈を受けた。それだけに、遅きに過ぎるとはいえ、彼の訃報に接して、穏やかながら、多少の感慨を禁じえなかった。

遺作となった作品は、2011 年に公刊された中編小説集『軽快に、短い服を着て、またはリュベロン幻想』（*Légère et court vêtue ou Lubies en Luberon*, Éditions du Luberon, 2011）であり、表題はラ・フォンテーヌの『寓話』の 1 つ「乳しぼりの女と牛乳壺」（巻の 7 の 9, *La laitière et le pot au lait*）からとられたもので、この寓話の主人公ベレットが「牛乳壺を頭に載せて、無事故で町まで行くつもり」で、「軽快に、短い服を着て」出かけたところ、夢想にふけって思わず飛び跳ね、牛乳壺を落としてしまう、という覆水盆に返らずの話から、借用されたものである。

プロヴァンスのとある村のレストランの常連で、元教職にあってラ・フォンテーヌの愛読者であると思われるユージェーヌと名のる老人が、好奇心のつよい若いユージェニという名の女性と出会い（序章）、彼女が男の創作した、危険な「借家人」の話、煙草の功罪をめぐる「ジャン・ニコの宿命的な不運」など、５編の〈ludique〉な（cf.同書 10 頁）小説を読んだ後、同じレストランで再会し、談笑する（終章）という洒落た体裁の、120 頁ばかりの小編である。

死の前年まで、創作活動を止めなかったレーモン・ジャンに敬意を表するとともに、この紙面を借りて彼の生涯と作品を回顧しつつ、極東の一読者による、ささやかな頌辞としたい。

＊

レーモン・ジャンは 1925 年〈大正 14 年〉11 月 21 日、マルセーユで生まれた。父親アレクサンドルはマルセーユの税関に勤める公務員で、温厚なカトリック信者であったが、政治的にはやや左翼に好意的というべきか、コミュニスムという言葉を息子に教えている。父方の祖父は、セヴェンヌ山脈に近い僻村の出で、植民地時代のフランス軍の将校となり、インドシナ、マグレブ諸国などに出かけ功績をあげたようである。生来の女好きでもあったようで、レーモン・ジャンもその血を受け継いでいると述べている。これらの事実については、彼が書き残したいくつかの自伝的エッセー、①『コミュニストであることの特異さ』(*La singularité d'être communiste,* Éditions du Seuil,1979, ②『美しい明るさよ、いとしい理性よ』(*Belle clarté Chère raison,* Besclée de Brouwer, 1985)、③『大地は青い』*(La Terre est bleue*, La Renaissance du Livre, 2002)などに詳しいので、それらに準拠しながら、以下の文章を続けたい。余談ながら、③は筆者のレーモン・ジャンへの関心を知って、フランスに居住している天満伸子氏から、出版直後に恵送されたものである。

母親ジュディットは、ユダヤの血を引く女性で、社会的にはリベラルなブルジョワ階級に属していたが、個人的には困難な幼少期を過ごした後、結婚して娘を設けたものの、交通事故で夫を失った後、マルセーユのとある書店で、新しく夫となる人と出会い、愛し合い、28 歳の年に、レーモン・ジャンを生むことになる。

父親は、先述の通り敬虔なキリスト教徒で、レーモン・ジャンも幼児洗礼を受けている。平穏な、溺愛する母親のもとで、少し過保護すぎるほどの幼・少年期を過ごす。例えば、夏休みには、必ず一家はマノスク近辺のサント・テュルに家を借りて、高原地帯での生活を楽しんでいたらしい。当時の愛読書はジオノの作品で、『丘』(*Colline,* 山本省訳、岩波文庫)を読んで衝撃を受けたと語っている。戦争が始まるに及んで以後は、ジオノが間違って対独協力者のリスト・ノワールに乗せられていたために、彼から遠ざかってしまったのは間違っていた、と同時に残念なことであったと述懐している（③40 頁)。

いま一つ、彼が少年時代から映画を見ることが好きであったことを、当時のマルセーユにあった二つの映画館によく通った思い出として語っている。彼の記憶に残

る最初の映画は、マクサンス・ヴァン・デル・メルシェの処女作『砂丘のなかの家』(*La maison dans la dune*, 1932)を映画化したもの〈1934 年に上映されている〉だったと述べ、ついでアメリカ映画に親しみ、チャプリン、クラーク・ゲーブル、ケイリ・グラント、ロレッタ・ユアングなどの名を覚えたと書いている（③32 頁)。他に、音楽、オペラへの言及もあるが、それは、ここでは割愛させていただこう。

リセはマルセーユの名門校サン・シャルルに進む。2 年先輩には、後にテーマ批評の先達として活躍するジャン・ピエール・リシャールがいたし、アルジェリア生まれで、後年、不幸にも精神を病み、妻を殺害する哲学者アルチュセールも、このリセの先輩であった。同級生にも、いくたの俊秀がいたが、ここではフランス中世史の専門家となるジャック・ル・コックと著名な舞踏家モーリス・ベジャールの名のみを挙げるに留めたい（③58 頁)。レーモン・ジャンはリセ・ティエールのイプノ・カーニュに進み、パリに出てノルマリアンへの道を目指すが、結局この試みは成功しなかった。

1940 年、レーモン・ジャンは 15 歳を迎える。その前年の 39 年 9 月、フランスはナチス・ドイツに宣戦を布告したが、マルク・ブロックのいう「奇妙な敗北」の時期を経て、40 年 6 月ペタンが首相に任命され、いわゆる対独協力政府・ヴィシー政権が成立する。蛇足ながら、敗戦後 70 年を迎えて、「戦後レジームからの脱却」を希求する指導者に率いられた自称アジアの先進的（？）経済大国は、その昔、この同じ年の 9 月、仏領インドシナに進駐し、日独伊 3 国同盟を結んでいたことも、忘れないでおきたい。

占領下でのマルセーユで､地元のエクス･マルセーユ大学の文学部に進んだ彼は、リセの友人ユーグ・ジュルネの勧誘に従い、FTPF「義勇遊撃隊」の青年部門の一員として、レジスタンスの運動に参加する。このことが、彼を終生フランス共産党に近い位置に立たせることになる。

「1946 年、わたしはまさに入党せんばかりのところに来ていた､､､しかし、今日でも判然とし難いいくつかの理由で､入党の決意を延期するほうを選んでしまった」（①27 頁）と書いていた彼は、晩年になって「自分が何者であるかを知らないキリスト教徒がいる。自分が何者であるかを知らず、不幸にしてキリスト教徒でない人たちもいる」というアンリ・ギユマンの言葉を引用しながら､「わたしにはキリストの教えを、譲歩することなく最優先すべきものに思われる」（③34 頁）とも述べている。彼の内心の微妙な葛藤が浮かび出てくるようである。ともあれ、後述するように、一時期党員であったこともあったが、党から著しく離れることはせず､「党の

同伴者」(compagnon de route) であり続け、同時につねに「懐疑の同伴者」(compagnon de doute)（③190 頁）でもあり続けた。因みに、②③の巻頭あるいは巻末に記された自著のリストから、①は削除されている。

戦後、彼は高等師範入試の失敗の汚名を、フランス近・現代文学のアグレガシオンの試験に合格することで贖いたいという思いから、エクスで文学士、DES の資格を取得した後、エクスではなく、ソルボンヌでの受験に挑み、1947 年、22 歳の若さで「15 番、良の成績」で合格し、両親を喜ばせた（③83 頁)。

教師としての最初の赴任地は、フランス中央部ニヴェール県の首邑ヌヴェール。その地のリセで教鞭をとるが、糟糠の妻となる貧しい鉄道員の娘、ジョルジェット・マルトと出会う。余談や蛇足が多くて恐縮だが、この妻となる人の名が、30 年代のドレスの名に似ていることを嫌って、彼はジョルジュと呼ぶことにした、と書いている（③88 頁)。因みに、回想記②は「昼と夜の同伴者、ジョルジュに」捧げられている。

2 年後の 49 年、二人は結婚するが、その年、ソルボンヌでアグレガシオンの指導を仰いだマリ・アンヌ・デュリ教授の推挙を受け、レンヌ大学の助手となる。そこには、その年のゴンクール賞（受賞作 *Week-end à Zuydcote*　三輪秀彦訳『ズイドコードの週末』）の受賞者で、英文学の教授ロベール・メルルがいて、自分も将来は教師と作家という二股生活を夢見ていただけに、多くのよい影響を受けたと語っている。

影響を受けた人物の二人目として、彼が挙げているのは、当時レンヌで神父を務めていたが、後に作家ジャン・シュリヴァンとなるルマルシャンである。彼は、どこにでもいる神父ではなく、月刊雑誌を刊行したり、映画クラブを創設したりして多面的な活動をしていた。少年時代から映画が好きであったレーモン・ジャンもその活動に加わり、交誼を深める。後年、シュリヴァンはパリの出版社 Besclée de Brouwer から、〈*Connivence*〉という叢書の編者となり、レーモン・ジャンの回想記②を、その中の 1 冊に加えている。

このレンヌ時代にセゲール社から最初の詩集 『緑の森』*Le Bois Vert* (1953) を出版している。本格的な創作活動の始まりであった。周知のように、彼の詩や詩人に対する傾斜は尋常ではなく、大学人として研究対象にしたのも、後述するように詩人たちであったし、実生活でもルネ・シャール、ギュヴィック、トルテルなどと長い付き合いを続けたようであるが、彼がその後に選んだ道は、詩人のそれではなく、

小説家という道であった。「晩年になって、詩人としての道を選ぶべきではなかったかどうか、自問することがしばしばであった」と述懐している(cf. *Le livre et le mot,* Acts-Sud, 2004, p.9)。因みに、周知のことだが、回想記②はアポリネール、③はエリュアールの詩句から題名を借用している。なお、ギュヴィックについては、横山昭正氏から恵送された服部伸六訳『詩を生きる　ギュヴィック自伝』（青山館、1984）から、教えられるところが少なくなかったことを付記しておきたい。

2 年後の 1951 年、またしても恩師デュリ教授の推挙により、アメリカ合衆国、フィラデルフィア大学での教授職の斡旋を受け、少しためらったものの、それを受け、妻と幼い長男レミ、生まれてまもない次男ローランを伴って未知の大陸に渡る。時は冷戦時、マッカーシーの時代。原子力の秘密をソ連邦に漏らしたという疑いで、ローゼンバーグ夫妻に死刑が宣告され、刑が執行される。そうしたアメリカ社会の息苦しい雰囲気を背景にしたのが、彼の最初の小説『ニュヨークの廃墟』（*Les Ruines de New York,* Albin Michel, 1959）である。この最初のアメリカ滞在は 2 年で終わるが、アメリカのいくつかの大学は、以後この左翼的な作家・大学人を十数回にわたって招聘している。アメリカ社会の懐の深さを示すものなのであろうか。

なお、この作品は 2005 年に、あまり知られているとは思えないマルセーユの書肆〈transbordeurs〉からも、刊行されている。巻頭で、デンマーク人ながらフランス語で作品を書いている特異な女流作家ピア・ペテルセンとレーモン・ジャンとの対談が載せられていて、この作品が書かれたときの状況や、およそ半世紀を経た後の作者の感想が読み取れるようで興味深い。

1955 年 10 月、アメリカを後にした彼の一家は、南ベトナムの首都サイゴンに来ていた。フランス文化省の教員派遣の要請に応じたものであった。当時のベトナムは、フランスから独立したとはいえ、17 度線以南はアメリカの傀儡、ゴ・ディエン・ジェムが権力を振るっていた時代で、アメリカが介入を強めるに従い、それに対する抵抗運動も強まりつつあった。彼はこの地の大学とリセで教鞭をとり、フランシス・ポンジュの詩などを教えていた。滞在 2 年目からは、フランス大使館の文化副アタッシェを兼務することにもなったようであるが、ベトコンによる抵抗の動きに無関心ではおれなかったようでもある。抵抗する若いベトナムの女性ズワンを狂言回しとし、コラージュなど、ヌヴォ・ロマンの手法を採り入れた小説『村』(*Le Village*, Albin Michel, 1966)は、こうした彼のサイゴン滞在の産物である。この小説は出版の 1 年後、第 1 回目のポール・ヴァイヤン・クーチュリエ賞を受けている。

それから 2 年後の 1957 年夏、今度はモロッコの首都ラバトに、レーモン・ジャン一家の姿が見られた。彼の祖父が植民地化のための戦争に出かけた土地に、脱植民地という時代に、自分が訪れることに感慨がなくはなかったが、この度の赴任は、サイゴンで知り合った外交官が、彼を見込んでのことであった。しかし、文化アタッシェに任じられた彼には、残念ながら、外交官としての適性は欠けていたようである。というのも、折しも、アルジェリア戦争が激化しつつあった時期で、とある友人から依頼されたアルジェリアの独立を求める「481 人マニフェスト」に、署名をしてしまったからだ。この署名文は、1960 年 9 月に発表され、サルトル、サロート、ロブ・グリエ、サガン、ビュトール、ブランショ等々の著名人が署名した「121 人マニフェスト」の先駆的存在とでもいうべきもので、時のド・ゴール政権の認知しえない性質のものであった。この種のマニフェストに署名をすることが、何ほどの実効力を持ちえたのか、またそれで事足れりとする知識人の存在を疑問視する向きのあることを、筆者も知らないわけではないが、ともあれ、このために 1959 年 9 月、彼は外交官の職を解かれ、フランスに強制送還されている。

苦境に立たされていたレーモン・ジャンに連帯の手を差し伸べたのは、マルセーユのコミュニストの集団や、平和団体であった。なかでも、エクス・マルセーユ大学文学部の著名な言語学教授で、先述の「121 人マニフェスト」にも署名をしたジョルジュ・ムナンは、温厚そのもののコミュニストであったらしく、住居の世話、母校サン･シャルルでの就職の斡旋までしてくれたようである。その頃の母校には、かつての同級生で、優秀な成績で高等師範を出た哲学者リュシアン･セーヴがいた。セーヴは後に共産党の幹部となって活躍するが、かくれた反面としてスターリン主義的側面もあったのではないか、と多少の批判も加えている（①52 頁）。

大学人としての彼は、ネルヴァルやエリュアールについての研究を進め、その成果をマルセーユで発行されていた雑誌 *Cahiers du Sud* などに発表し、それらは纏められて「永遠の作家叢書」（スィーユ社）のモノグラフィとして公刊されることになる（ cf.『ネルヴァル』入沢康夫・井村実名子訳、筑摩叢書・214）。やがて業績が評価されて、エクス・マルセーユ(現在はエクス・プロヴァンス)大学の講師となり、着々と学究としての道を歩み始める。またしても余談ながら、1975 年に刊行されたネルヴァル、ロートレアモン、アポリネール、エリュアールを扱った『欲望の詩学』（*La Poétique du désir*, Éds. du Seuil, 1975）で、彼は文学博士号を授与されている。なお、これとは別に、種々の文芸雑誌に発表したディドロから現代作家に至る作家論は『文学と現実』(*La littérature et le réel,* Albin Michel, 1965)、『文学の実践』(*Pratique de la littérature,* Éds. du Seuil, 1978)などに纏められている。因みに『文学と現実』は、

先述のジョルジュ・ムナンに捧げられている。

このころ、平和運動が高揚し、彼がベトナムやモロッコにいて、抵抗運動に好意的であったという事実が幸いしてか、1961 年にはソ連邦に招聘され、ヘルシンキでは雑誌「現代」の購読者として、かねてから尊敬していたサルトルにも会い、以後、東欧圏諸国にいく度となく招待されて見識を広めた。

社会人としてのレーモン・ジャンの生活の叙述が、少し先に進み過ぎたようなので、小説家レーモン・ジャンに戻ることにしよう。モロッコ滞在からは、モーリアックが扱った主題のパロディとも思われる、小説家とその登場人物たちの関係を扱った『講演』(*La Conférence,* Albin Michel, 1961)が生まれている。ここでは、ヌヴォ・ロマンの作家たちの主張に理解を示しつつも、彼らの主張とは異なる彼なりの小説作法を、小説の主人公ミシェル・ベジャールを通して開陳しているところも散見される。そういう意味では、重要な作品だと言ってよいであろう。

マルセーユの動物園を舞台とした『柵』(*Les Grilles*, Albin Michel, 1963)には、まだヌヴォ・ロマン的手法が色濃く残っているが、町長選挙に打って出た夫ガストンを助け、獅子奮迅の働きをする妻リアを主人公とする小説『ラ・ヴィヴ』(*La Vive*, Éds. du Seuil, 1968)では、そうした特徴は少し影を潜めている。

そうこうしているうちに、1968 年、激動の五月革命の時期を迎える。この時期の評価については、その立場によってさまざまであることは言うまでもないが、この時のフランス共産党の対応が「大衆を広く動員したにもかかわらず、政治的には失敗であった」と考えるレーモン・ジャンは、それ故、党の方針を容認していたわけではないにもかかわらず、一見奇妙なことだが、ド・ゴールが共産党への対決姿勢を鮮明にしたことに大きな危機感を抱いたこと、加えて、いわゆる「プラハの春」に象徴される「人間の顔をした社会主義」の実現を信じたいという二つの理由から、揺らいでいる党を支えるためには「同伴者」でなく「党員」になるべきだと思い、「この時期のある雨の降る木曜日、エクスの市役所前の広場に集まった数人の仲間に加わり、共産党に入党しよう」としていた、と述べている（①58 頁）。しかし、その後、周知のようにチェコ・スロバキアでの試みは挫折し、レーモン・ジャンにとっては失望と苦悩の時期が続く。正確なところは不詳だが、ほどなく離党して「懐疑の同伴者」となっていったようである。

1968 年 5 月の事件を、風俗と精神構造に対する重要な革命であったと捉えていた彼が、積極的な行動に出た事件があるとすれば、それはいわゆる「リュシエ事件」

と呼ばれているものであろう。マルセーユのリセの英語の教員であったガブリエル・リュシエが、教え子である高校生を愛するようになるが、相手の両親から訴えられて、未成年誘拐罪のかどで投獄され、ついに心神の耗弱をきたして自殺に追い込まれた、という事件である。リュシエが彼の教え子だったということもあるが、レーモン・ジャンは彼女を擁護する立場に立ち、不寛容な司法の判断を厳しく糾弾する。フランスの世論も、この問題を取り上げ賛否両論が戦わされた。アンドレ・カイヤットが映画『愛のために死す』を作成し、世論に訴えたのもこの時期である。

ここで、少し私事にかかわることを書かせていただくと、当時、筆者はポワティエ大学に留学中で、同じ大学都市で起居を共にしていた、仄聞によれば、いまは故人となられた成蹊大学の細田直孝氏が、東京の出版社とつながりを持っておられて、その出版社からの要請があったのか、映画の台本になったものを自分が訳すので、スィーユ社から出ているガブリエル・リュシエの『獄中書簡』(*Lettres de Prison* de Gabrielle Russsier, précédé de *Pour Gabrielle* par Raymond Jean, 1970)を訳さないか、というありがたい申し出をいただいた。出版社の判断で、邦訳題は『愛と死の手紙』（二見書房、1971）となったが、これ以後、レーモン・ジャンと筆者との交誼が始まったというしだいである。

1971 年、彼は小説『二つの春』(*Les deux printemps*, Éds. du Seuil, 1971 “10/18 “、1978)を公刊する。第 1 部「1969 年 4 月、プラハにて」、第 2 部「フランス、1968 年 5 月 10 日の夜から 11 日まで」、第 3 部「1969 年 4 月、プラハにて」から成るこの小説は、作者の自信作ではあったが、世評はそれに応えるものではなかった。もし、興味を持たれる方がおられれば、遠い昔の論考だが、拙稿「レーモン・ジャン試論（3)」（広島の文芸同人誌「歯車」34 号、1982）を参照されたい。

1973 年には、アラブ人に対する差別問題を扱った『12 号路線』(*La ligne 12*, Éds. du Seuil, 1973)を、その翌 74 年には、万引きをして裁判にかけられるヴェロニックを主人公とする『注意深い女』(*La femme attentive*, Éds. du Seuil, 1974)を発表している。いずれについても、前掲の拙稿「レーモン・ジャン試論（3)」に詳しいので、ここではこの二つの作品にも、主人公が不当な裁判を受けるという意味では、リュシエ事件の痕跡が見られるのではないか、ということのみを指摘しておきたい。なお『12 号路線』については、寺迫正廣氏が、周到な論考を書かれていることを付言しておく（「現代フランス文学を読む、『12 番路線』」、大阪府立大学「独仏文学」第 24 号、1990）。

1978 年、古く 17 世紀初頭の 1611 年に、男でありながら魔女裁判にかけられた末に、エクスで火刑台の犠牲者となった神父ルイ・ゴーフリディの生涯を扱った歴史小説『暗い泉』(*La fontaine obscure*, Éds. du Seuil; 1976, Livre de Poche, 1978)が刊行されている。この作品についても語るべきことは多いが、いまはその紙幅もないので、作品の梗概については河合亮先生の「レイモン・ジャンの作品について」(1, 2)(「流域」22、23 号、青山社、1987／1988)、登場人物については、拙稿「レーモン・ジャン『暗い泉』考、上、下」(大阪学院大学外国語論集第 28，30 号、1993，1994)に詳しい、とのみ記するに留めたい。因みに、筆者が「レーモン」と表記しているのは、ラルスの『発音辞典』(1980 年版)に準拠すれば[i]の音はないので、そうしただけのことで、「レモン」が最適の表記に近いのかもしれない。

1978 年には、南仏、アルプス山脈に近い盆地にある架空の農村社会での、第 2 次大戦中のコラボ派とレジスタン派の争いを背景として、そこへ自由に生きようと決意して北のロレーヌ地方からやって来た、技術中・高校（C.E.T.)の女性教師ジューリアの受難を描いた小説『裸の川』が発表されている。この作品にも、ガブリエル事件の影響が見て取れるが、主人公が、旧コラボ派によって髪の毛を刈り取られてしまうところは、エリュアールを想起させる。詳しくは拙稿「フランス文学における＜femme tondue＞のイマージュ」(大阪学院大学通信、第 23 巻　第 2 号、1992)を参照されたい。

1980 年、彼は 300 頁を超える大作『記念写真』(*Photo souvenir*, Éds. du Seuil, 1980)を発表する。73 年 9 月 11 日に起きたチリ、サンチャゴでのピノチエトによるアジェンデ政権打倒のクーデタに始まり、ベトナム戦争の終結までを、AFP の報道記者フィリップ・ライエルマンの眼を通して描いたものである。この作品の最後で、主人公を死なせているところは象徴的で、一連の政治参加（アンガジェ）の小説の終わりを意図していたのではないかと思わせる。なお、この作品について興味がおありの方がいれば、本誌 21 号に書かせていただいた拙稿「『レーモン・ジャン『記念写真』再読」を参照していただければ幸いである。

1980 年 11 月、彼の身辺で、思わぬ悲劇が起きていた。レンヌで生れた次男ローランが麻薬吸引の末、自ら生を絶つ行為に出たのであった。享年 27 歳。ピストル自殺を図ったが死にきれず、6 週間生き延びた後でのさいごであったが、レーモン・ジャンはこの息子の立場に立って、息子の名の頭文字を題名にしたレシ『エル』(*L.* Éds. du Seuil, 1982)を発表し、自らは、地中海の小島にある修道院の籠り、沈思黙考する時間を過ごしたようである。

同じ頃、60 年代に書いた子供用の物語『エレーヌと鳥たち』(*Hélène et les oiseaux*, 1965, Éds. La Farandole) に続いて、エクスの町を描いた短編(*Aix en Provence*, Éd. d'Alain Barthélemy, 1981)を出版している。

70 年代以降、レーモン・ジャンは世界各国からの要請に応じて、文化使節として出歩いていた。1983 年秋には、日本の学界からの招聘に応じて、第 1 回目の来日を行い、各地の大学で、ネルヴァルやヌヴォ・ロマンなどについての講演を行った。当時、筆者は広島大学に勤務していたので、彼を招いて講演会などを開いた。その時の印象を、彼は回想記②に詳しく書いている(cf. pp.50-54)。「広島、長崎が破壊された年に、20 歳を迎えていた世代に属する人間」として、広島という土地に畏敬の念を抱いたのは、ビュトールのいう「土地の霊」によって引き起こされたものであったと述べているが、詳しくは、拙稿「レーモン・ジャン　その後」（前掲、同人誌「歯車」39 号、1988）を参照されたい。なお、日本には 2 度、韓国、中国にも何度か出かけている。

その年の暮れ、広島で世話をかけたことへの礼の印にと言って、彼から 1 冊の書物が送られてきた。1720 年、マルセーユで起きたペストを扱った小説『黄金と絹』(*L'or et la soie*, Éds. du Seuil, 1983)である。一読した筆者は、その邦訳を試みたいと思ったが、当時の筆者は雑務に追われていて、いつしかそれを忘れてしまっていた。今春、彼の訃報に接して多少穏やかでない気持ちに駆られたのは、このことであった。そこで毎日が日曜日で自分が思いの他に生き延びているのは、そのためかと勝手に思うこととして、第 1 部 5 章、第 2 部 4 章、全編 218 頁からなるこの作品の日本語訳を試み、一応、その仕事を終えることができた。それを公刊できれば、彼との定かでない約束のごときものを果たせたということになるのだが、残念なことに、筆者の手に負えないプロヴァンス語の哀歌 1 篇、いくつかのマルセーユ方言、著者でなければ答えようのないと思われる疑問点が２，３あり、いまとなっては、それらを聞きただすことができないことを悔やんでいる。それ故、ここでは、作品の内容と構造について多少の見解を示すに留めたい。

「わたしの名はエティエンヌ・ブリュヌランです。地方の物知りと呼ばれている人間です。二つの情熱を抱いています。一つは歴史の真実への、いま一つはマルセーユの娼婦たちへの。」この 4 つの短い文章で、小説は始まっている。ブリュヌランはこの小説の狂言回しというか、全編を通じての語り手となる。しかし、彼はカミュの『ペスト』における医師ベルナール・リウーのように、蔓延するペストの流行

と戦う人物ではなく、自分はマルセーユの郊外セプテームの館に、3 人の娼婦たち（ベルガモットは語り手の同伴者、アポリーヌは第 1 部 2 章のセザールの昔の客、コラリは 4 章のパスカルのなじみの客だった、という想定）と籠って難をさけ、一人の「傍観者」として、ペストという災禍が、どのような経過でマルセーユに持ち込まれたか、当時のマルセーユの人たちをどのように苦しめたのか、ペストの災禍が過ぎ去った後のマルセーユで何が起きていたのか、を語る仕組みになっている。

第 1 部の冒頭の章では、ペストが蔓延する直前のマルセーユの様子が、代表的なバロック演劇の一つ、キノの台本にリュリが作曲した『ファエトン』を、語り手が観劇するところから始まる。そのなかで、同じように観劇に来ていた友人に出会い、オリエントからマルセーユに帰港した大型交易船〈ル・グラン＝サン・タントワーヌ号〉が、ル・ブリュスクという小さな入り江に数日停泊した後、姿を消したことを、その友人の口から言わせている。因みに、宮崎揚弘著『ペストの歴史』（山川出版社、2015）では、この船はトゥーロンに寄港したという説が紹介されているが、筆者が調べた限りでは、歴史家でないので断言は慎むが、ル・ブリュスクのほうが史実に近いようである。

2 章では、この大型交易船の元乗組員で生き延びていたセザールなる人物に、マルセーユ～オリエント往復の航跡を語らせている。トリポリで積荷した綿や絹に付着していたペスト菌から、感染した乗客と乗組員が死亡したにもかかわらず、いったんは、マルセーユ近辺まで戻りながら、イタリアのリヴォルノに戻り、船の健康状態は良好であるというパテントをえて帰港した経緯が、よく分かるように仕組まれている。

3 章では、当時の欧州最大の綿や絹の見本市―(交易船が運んできた積荷もそこで売買される予定であった)―が開かれる、川を挟んでタラスコンの対岸に位置するボーケールの様子が、語り手が娼婦たちとの生活を始める以前に、恋人であった良家の娘ローズを伴って出かけた時の回想記として示されている。映画でいうフラッシュ・バックの手法であろうか。絹に官能的な魅力を感じるローズの描写、語り手が稀覯本を見つけて狂喜する古書店の場面などには、興趣尽きないものがある。

4 章は、マルセーユ港湾の検疫官のもとで、書記を務めていたパスカルが主人公となり、〈ル・グラン＝サン・タントワーヌ号〉入港の際の様子が語られる。そこから浮かび上がるのは、町の行政の実権を握る助役たち、検疫官自身、船長までもが、じつは積荷の主であるという事実であった。彼らは、ともに助け合わねばならない「運命共同体」であることが、しだいに読者にも分かってくる。

5 章は、2 章の証人セザールが正気を失い、狂気に襲われつつ、終末を迎える過程

が、幻覚を交えたシュールレアリスム的な手法で語られる。そこで第 1 部は終わる。

第 2 部は、ペストに対する当時の宗教界、医学界に対するユーモアに溢れた諧謔的批判が主体をなしている。1 章では、当時のマルセーユ司教で、人望も厚かったと言われているベルサンス猊下への批判である。「苛立っておられる神は、人びとの罪を罰しようとされて」ペストを用いて苦しめておられるのだ、とする彼の言説を、許し難い反啓蒙主義として、語り手は酷評している。この司教については、カミュもパヌルー神父の口を借りて、ペストに対する人事を尽くしたと判断した猊下が「食料を蓄えて家に閉じ籠り、その家の周囲に塀をめぐらした」ために、人びとの怨嗟の的となり、塀のなかに死体が投げ込まれた、と書いていたことを想起していただこう（cf.　宮崎嶺雄訳『ペスト』336 頁、新潮文庫）。

2 章では、医学界への批判が展開される。ペストに対して献身的に治療に専心し、自らも感染して亡くなった多くの医師がいた反面、現在われわれが目にしている宇宙飛行士の服装に酷似した衣服を着用し、「酢を全身に塗ること」で、それで身の安全が保たれるとした医師たちも、少なからずいたようである。当時の医学界の拠点モンペリエからマルセーユに派遣された高名な医師と、ペストが未知の微生物の媒介によって伝搬されるのではないかと考える医師との論争が、この章の主たる内容をなしている。

3 章では、語り手の同伴者であるベルガモットの臀部にできた腫瘍がペストによるものと判断したブリュヌランが、彼女を伴い、マルセーユの旧知の医師を訪ねるくだりが語られている。因みに、この小説は後述する南仏アルルの出版社 Acts-Sud からも、1990 年に〈Babel〉叢書の 1 冊として出ているが、その版の序文を書いているユベール・ニッサンはこの章に言及し、「自由を得るべく、ペストで亡くなった人たちを運んでいる徒刑囚たち、公の風説が災禍の原因と咎めたために、犠牲に供された犬や猫の死骸が漂っている港」の描写などが、真に迫っていて圧巻であると評している。

この小説を閉じる最終章は、夢と現実が交錯するような形で、まずはペスト終息後のマルセーユで行われていた、ペストを運んできた積荷の主の一人であった、いわばペスト伝搬の責任者の一人でもあった町の筆頭助役、ジャン・バティスト・エステールに対する叙勲の場面から始まっている。貴族に列せられたうえ、特別手当までが与えられる。ベルサンス猊下、ローズ騎士など、その他多くが、ペストの蔓延に抵抗し、多くの貢献をしたとして顕彰される。他方、危機を脱した庶民は、奔放な生活に走る。その細部が語られている。これも抗しがたい、人間の性とでも言

うべきものであろうか。

以上述べたことでお分かりのように、この小説は、カミュの『ペスト』のように、時系列的な叙述の作品ではない。事件の経緯は、第 1 部で、ほぼ了解できるように書かれている。第 2 部は、事件に登場する諸人物に対する、作者の注釈のようなものである。そこに、ペストを天罰とする絵を画く画家の話、救いを求めてセプテームの館に近づいた少年を見捨てる話、オリエント帰りの商人が、騙されたあげくの果てに追い剥ぎになる話、などが挿入されている。しかも、随所で語呂遊びを楽しんでいるかに見えるこの作品は、あまり知られていない 1720 年のマルセーユのペストを扱った、彼が少年時代から愛好した映画の手法をも駆使した、佳作だと言っておこう。

68 年以後、パリのヴァンセンヌから、レーモン・ジャンに招聘の動きがあったようであるが、結局、彼はエクスを離れることはしなかった。「それが正しかったか間違っていたのか、分らない」（③195 頁)と述べているが、彼をエクスに引き留めたものの一つは、彼の同僚でもあり、ベルギー出身者ながら、フランスに帰化した作家、詩人、エッセイストでもあるユベール・ニッサン（1925～2011）が、富豪の出である夫人の助けを借りて、私財を投じてアルルに創設した出版社 Acts-Sud の存在だったようである。なぜなら、パリにいなくとも出版ができるという意味では、無視しがたいものがあったと思われるからだ。

現代史という歴史に真摯にかかわる人間を、彼なりの手法で描いた『二つの春』や『記念写真』が、作者の期待に反し世評が芳しくなかったこともあって、『黄金と絹』を最後に、彼は長編小説から、自由で奇抜な発想の、彼の言葉に従えば〈ludique〉な中編小説へとシフトを移している。

幸いなことに『ベラ・Ｂの幻想、その他』(*Un fantasme de Bella B. et autres récits,* 1983, Acts-Sud)が、ゴンクール中篇小説賞を受けたこと、加えて、『読書する女』(*La lectrice*, 1988,Acts-Sud)（鷲見和佳子訳、新潮文庫）が、映画化されて好評を博したことが、レーモン・ジャンをして中篇小説家のへの道を加速させたようである。

なお邦訳としては同じ訳者による『ふたり、ローマで』(*Transports*, Acts-Sud, 1988、新潮文庫)があるが、前掲の寺迫正廣氏は、『読書する女』について、内容からすれば『朗読する女』のほうが適切ではないかと傾聴すべき指摘をしておられる。なお付言すべきは、本稿を書き終えた段階で、松本陽正氏から、レーモン・ジャンの小説には、もう 1 冊の邦訳があることを教えられたことだ。不明にして筆者の知るところではなかったが、桑原隆行訳『カフェの女主人』（春風社、2013 年、 *La cafetière,*

Éds. J'ai lu, 1995）がそれである。こうして、彼の作品が少しずつであれ、邦訳されていることに、泉下の著者も喜んでいることであろう。

ともあれ、中編小説家レーモン・ジャンを論じることは、（余命があれば）別稿に譲るとして、ここで彼の中篇小説を列挙することはしないが、Acts-Sud を中心とする南仏のいくつかの出版社から、10 篇に近い作品が公刊されることになる。

上記の作品以外にも、筆者が彼から贈呈を受けた作品には『セザンヌ、生涯、空間』(*Cézanne, la vie, l'espace*, Éds. du Seuil, 1986)、『サドの肖像』(*Un portrait de Sade,* Acts-Sud, 1989)、『アンドレ・シェニエのさいごの夜』(*La dernière nuit d'André Chénier*, Albin Michel,1989) といった伝記的な著作もある。思うに、レーモン・ジャンは、多産で、多方面にまたがる精力的な著述家であった。

エクスでの生活を終えたレーモン・ジャンは、筆者も一度訪れたことのある丘の中腹に位置した一軒家を後にして、アプトに近いガルガに居を移し、自由なホモ・ルーデンスらしく、ジョルジュとの生活を楽しんでいたと推測される。彼は、冒頭で紹介した最後の作品『軽快に、短い服を着て、、、』に登場する老教授をして、自分はＡで始まる 4 つの町、エクス、アルル、アヴィニオン、アプトが好きだと言わせている（cf. 同書 8 頁）。この場所に移り住んだ所以も、この辺りにあったのかもしれない。

「あるとしもなき　花のあかりに　昏れなずむ山　わが火の山」（蔵王詩集『氷の花』所収「蔵王に寄す」のなかの 1 行）。この山形生まれの真壁仁の詩の存在は、原野昇氏から教えられた。原作者の意図とは異なるかもしれないが、ラ・フォンテーヌの『寓話』を読み続ける老人の、遊び心に満ちた話を書き続けながら、リュベロンの丘陵地帯を散策していた時のレーモン・ジャンの心境も、なぜかこの詩のなかに凝縮されているように思われてならない。

（2015 年 11 月）

Hommage à Raymond JEAN

Tsuyoshi SUGIYAMA

Ce printemps 2015, j'ai appris incidemment que Raymond JEAN était décédé le 3 avril 2012 dans le Vaucluse, à Gargas, à l'âge de 86 ans.

Grand universitaire, il a d'abord été assistant à l'Université de Rennes, puis à celle de Philadelphie , en Pennsylvanie. Il a aussi passsé deux annnés respectivement au Viêt-Nam et au Maroc avant de devenir professeur de littérature française moderne et contemporaine à l'Université d'Aix-Marseille. Écrivain fécond, Raymond JEAN est également considéré comme un spécialiste des études poétiques ; il a publié des essais notamment sur Nerval, Lautréamont, Apollinaire, Éluard et René Char.

Bien que toujours proche du parti communiste, il était avant tout "compagnon de doute", comme il le disait dans son livre intitulé *La Terre est bleue.*

De nombreux pays, dont le Japon en 1983, l'avait invité en tant que missionnaire culturel et je l'avais accueilli même à Hiroshima à l'occasion de sa conférence sur le nouveau roman, qui était en vogue à cette époque.

En ce qui concerne le romancier Raymond JEAN, il y aurait beaucoup à dire. Auteur de plus d'une dizaine de romans, *Les Ruines de New York, Le Village, La conférence, La fontaine obscure* et *L'or et la soie,* entre autres. Son œuvre littéraire, marquée de la technique romanesque du nouveau roman, pourrait se classer en deux catégories: engagée ou dégagée.

Un fantasme de Bella B. et autres récits, couronné par le prix Goncourt de la nouvelle, marque le début de sa création d'ouvrages fantastiques,teintés d'érotisme mais avant tout ludiques selon lui. Il en a été ainsi jusqu'à la fin de sa vie comme en témoigne son dernier ouvrage : *Légère et court vêtue ou Lubies en Luberon.*

Au regard de son histoire personelle et de sa création romanesque, qu'il soit permis, à un fidèle lecteur de son œuvre, de rendre très tardivement, d'un pays de l'Extrême-Orient, un sincère hommage à ce regretté professeur et écrivain qui aimait profondément la Provence, son pays natal.